

タスク・シフト/シェアの専門知識を持つ臨床検査技師による養成校での講義の有用性

◎畑本 大介¹⁾、杉山 聡²⁾、青地 祐³⁾、小笠原 篤¹⁾

静岡医療科学専門大学校¹⁾、一般財団法人 富士脳障害研究所附属病院²⁾、地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院³⁾

【はじめに】臨床検査技師養成校(以下、養成校)において、令和4年度入学生よりタスク・シフト/シェア項目を含むカリキュラムが適用されている。タスク・シフト/シェアは、良質かつ適切な医療を提供する体制を確保するために必要とされているものの、その分野・項目に対する専門知識を有している教員が、必ずしも講義をしているとは限らない。今回、本校の医学検査学科学生にタスク・シフト/シェアに対して興味を持ってもらうために、専門知識を持つ臨床検査技師に講義を担当してもらい、その有用性について検討した。

【対象と方法】持続皮下グルコース測定検査(以下CGM)、術中神経モニタリング検査(以下IOM)についてそれぞれ十分な臨床経験がある臨床検査技師に、実演や動画視聴を含む180分の講義を依頼した。その後、受講した学生30名を対象としたアンケート調査を行い、27名から回答を得た。講義後のアンケートは理解度や教員の話し方、配布資料や理解を深めるための工夫などに関する9項目について6段階(とてもそう思う、そう思う、ややそう思う、あまりそう

思わない、思わない、まったくそう思わない)で行った。また、総合的な観点で講義は有意義であった、という設問への回答は、とてもそう思う(10)から、まったくそう思わない(0)の11段階で行った。マーケティング分野で利用されるnet promoter score(以下NPS)を、10、9と回答した割合から6、5、4、3、2、1、0と回答した割合を引いて算出した。NPSの比較対象として、令和5年度前期に受講した専門教科7科目のアンケート結果を用いた。

【結果】NPSは、専門教科7科目平均の22.4(±26.6)と比較して、CGMの講義で77.7、IOMの講義で48.1となり高い傾向を示した。CGMの講義に対するアンケート結果では、「学生の理解を深めるための工夫をした」という項目に対して、55.6%の学生が「とてもそう思う」、40.7%の学生が「そう思う」と回答した。

【考察】タスク・シフト/シェアの専門知識を持つ臨床検査技師による養成校での講義は、その検査に対して学生がより興味を抱くことに繋がる可能性が示唆された。

連絡先；053-585-1551